

第2回 AMIN 会議を終えて

筑波技術大学保健科学部 藤井亮輔

はじめに

筑波技術大学創基 20 周年記念を兼ねた第2回 AMIN 会議が、10月23日からの3日間、東京都中央区の晴海グランドホテルで開かれました。AMINとは、「アジア医療按摩指導者ネットワーク」の英名の略称です。その目指すところは、アジアの視覚障害者にマッサージを普及するための活動に取り組む指導者が、専門的な知識と技術を共有しつつ互いに資質を高め合うことにあります。昨年9月に開かれた世界盲人連合アジア太平洋地域協議会（WBUAP）のマッサージセミナー（つくば大会）の最終会議で筑波技大が提唱し、1年余りの準備を経て、今回の会議で正式発足の運びとなりました。日本財団の資金援助のもと、筑波技大に設置された「AMIN 推進委員会」と事務局が日常の運営に当たることとなります。以下、会議の概要を述べ、AMIN 発足の意義と今後の課題について触れてみたいと思います。

1. 会議の概要

（1）参加国と参加者の数

今回の会議には、日本を含む13カ国・地域[※]から、37人（うち付添13人）の海外参加者を含む88人が集いました。この他に、JICA 沖縄国際センターの「視覚障害者マッサージ指導者育成コース」で学ぶ5名の研修員（スリランカ、中国、サモア、マレーシア）がゲスト参加したことで、国際色がいっそう豊かなものになりました。

海外からの参加者は、現役のマッサージ指導者と各国盲人協会の代表者たちです。国内からは、筑波技大および日本財団の関係者、視覚障害者団体の代表の他に、AMIN のサポート組織である「講師人材バンク」（講習会の講師とテキスト執筆の協力者組織）の登録ボランティアも遠路を押し多勢駆けつけてくださいました。こうした華やいだ顔ぶれと国際色に包まれた会場を舞台に、田端美智子氏の同時通訳のもと、会議の火蓋が落とされました。

※参加国・地域：バングラディッシュ、カンボジア、フィリピン、インドネシア、韓国、マレーシア、モンゴル、ラオス、タイ、ベト

ナム、台湾、香港、日本

(2) 開会式と記念講演

第2回 AMIN 会議は、大沼直樹学長の歓迎の辞で幕を開けました。来賓として最初に挨拶に立った笹川吉彦氏（日本盲人福祉委員会理事長）は、「按摩は盲人にとって重要な職業。アジアの多くの視覚障害者がこの技術を手で自立の道を歩んでほしい。この夢を AMIN で育つ指導者のリーダーシップに託したい」と述べ、AMIN 設立の意義を称えました。続いて登壇したグレース・チャン氏（WBUAP マッサージ委員会委員長）と石井靖乃氏（日本財団）も、それぞれの立場から、アジアに医療按摩を普及するためには指導者間の交流や対話が不可欠との認識を示し、指導者相互の国際ネットワークの構築を目指す AMIN の活動に大きな期待を表明しました。

開会式に続いて行われた記念講演では、独立行政法人高齢・障害者雇用促進機構の指田忠司上席研究員が、「アジア諸国における視覚障害者の職業事情と展望」と題して、日本や欧米との国際比較の視点を交えながら、アジアの視覚障害者が抱えている職業問題の深淵を、氏自身の研究や豊富な国際活動を通して得た知見をもとに、わかりやすく解説してくださいました。この会議の基調にふさわしい内容の講演だったと思います。

(3) 設立総会

2日目には AMIN 設立総会が開かれました。長岡英司議長（筑波技術大学）の進行のもと、AMIN の組織の在り方や具体的な活動めぐって活発な意見交換と質疑が行われました。討議の結果、医療按摩の普及を促すため WBUAP マッサージ委員会との協力関係を強化することの重要性を確認し合った上で、当面は、筑波技大に設置する推進委員会主導で指導者育成、テキストの作成等の事業を推進する規定を盛り込んだ、AMIN 規約案が承認されました。

今年度の事業計画としては、海外講習を軸にした指導者育成を進める一方、テキストの英語・現地語への翻訳、講習対象国への人体模型や治療用ベッドなど教材・備品の供与、メーリングリストの立ち上げなどを進めることになりました。事業の柱となる指導者育成事業の今年度計画では、マッサージの普及が途上ないし後発にある国を優先するという基本方針のもと、カンボジア、ラオス、ベトナム、モンゴルに講師を派遣する海外講習と、マレーシアからマッサージ指導者を招いて行う国内講習の企画がすでに進行中です。

(4) 国際シンポジウム

設立総会に前後して行われた国際シンポジウムは公開ヒアリングの形式で進められました。今回の会議に合わせて提出されたリアルレポートと「視覚障害者の職業実態に関するアンケート」の結果を題材に、各報告者から、自国の視覚障害者の就学や就業の実態、マッサージを教える指導者や学校の数、社会の理解度などについて詳細な報告を受けた後、座長やフロアから質問を投げかけ、よりリアルな現状に迫ろうという企画です。このヒアリングに参加した人々は、異口同音に、域内の多様な実態を理解し合えたこと、自国が置かれている現状や位置が客観的に認識できたことが良かったと、感想を述べていました。このことは AMIN の活動を展開するための基礎として重要なことであり、その意味で、公開ヒアリングは当を得た企画だったと思います。

2. AMIN の意義と今後の課題

今回の会議をとおして、東南アジアの国々でもマッサージを業とする視覚障害者が少しずつではありますが着実に増えていることが明らかになりました。これは長年にわたる全国の盲学校や沖縄プロジェクトなど地道な国際支援の成果に他なりません。しかし、指導者、学校、テキストなど、マッサージ師の養成に欠かせない教育基盤が絶対的に不足している状況に変わりはなく、業の普及の歩みを著しく遅らせていることも事実です。こうした中で、新たな人材の育成と既存の指導者のグレードアップを目指す AMIN が設立されたことは、アジアの視覚障害者にとって歴史的な一歩であり大きな福音となることでしょう。

ただ課題も多くあります。まず、指導者育成が、短期講習の積み重ねだけで、はたしてどの程度、実を挙げられるかが不透明な点です。早晩、長期に海外派遣できる講師の確保が迫られることでしょう。その場合には、青年海外協力隊等、JICA の事業とのタイアップなども視野に入れなければならなくなるかもしれません。また、通訳の問題も大きな課題です。医学用語を日本語と現地語に通訳できる人材を確保することさえ大変ですが、按摩・マッサージの技術用語や東洋医学の専門用語を通訳できる人は希有とって過言ではありません。さらに、1期5年でスタートした本事業が終了した後のフォローアップをどうするか。AMIN を自立した当事者組織と

して育て上げるための効果的方策は何か等々、残された課題の種はつきません。

おわりに

公開ヒアリングとアンケートの結果をとおして、視覚障害者の自立を可能にする医療按摩の普及を渴望するアジアの思いが、改めて浮き彫りになりました。今回の会議は、AMIN という気球に、その思いと夢を吹き込むための行程だったと思います。これからは、膨らんだこの気球を空高く上げる作業が待っています。多くの方々のご支援による追い風を期待してやみません。